

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：56101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520060

研究課題名(和文) 懐徳堂学派における教育思想の研究 その経学思想と経世思想との融合

研究課題名(英文) The study of educational thought in Kaitokudo school - integration with the study of Confucianism thought and administration thought -

研究代表者

藤居 岳人 (FUJII, taketo)

阿南工業高等専門学校・一般教科・教授

研究者番号：80228949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、懐徳堂学派の教育思想を分析した。特に、懐徳堂学派の理念としての経学思想が現実世界に関わる経世思想 その一環としての教育思想 に反映される様相を分析し、道徳と政治との双方の重視が懐徳堂儒者の基本的立場だと明らかにした。そして、道徳と政治とのつながりが「修己」から「治人」へと向かう直線的な流れではなく、両者を同列に置いたうえで止揚することによって得られる高度な「自己」を基底とする統合を懐徳堂学派の儒者が考えていたことを解明した。その高度な「自己」の概念を提出したことが日本近世儒教思想上における懐徳堂学派の思想史的意義である。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyzed the educational thought in Kaitokudo School. To be exact, I analyzed the aspect that the study of Confucianism thought as the philosophy of Kaitokudo School reflects the education thought as part of the administration thought to be related to real world, and I proved that Kaitokudo Confucians basically regard both morality and politics as important. Particularly, I made clear that Kaitokudo Confucians thought about the relation between morals and politics is not the course from "discipline myself" toward "rule persons" but the unification of both of them (this unification is based on high level "self" provided by sublimating both of them). On Confucianism thought history of Japanese early modern times, the historical significance of Kaitokudo School is that they brought up the concept of high level "self".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：懐徳堂 儒者 中井竹山 中井履軒

1. 研究開始当初の背景

懐徳堂に関する研究は、日本近世儒教史・日本近世思想史等の分野にわたって研究が進められてきた。日本近世思想史において取り上げられる学者の多くは儒者で、彼らの基本的素養は漢学である。しかし、従来、彼らの漢学的教養の中心たる経学研究の成果を十分に踏まえて、日本近世思想史上に位置づけようとしてきた研究は必ずしも多くない。

従来、諸研究を尊重しつつ、中国学の古典読解の知識・手法を基底として、これまでの諸研究を総合する観点から研究を進めることが必要である。それによって、さらに重層的に日本近世における儒教思想受容の様相を明らかにできる。本研究は、中国思想史と日本思想史を中心とした上述の他の学問分野との相互交流をいっそう有機的に図ってゆくための一つの契機となる。

研究代表者の藤居は、懐徳堂学派の儒者中井履軒の経学研究を取り上げて、そこから窺える理想的人間像としての聖人像の様相を検討してきた。その聖人とは、「修己」を極めた理想的人格者であるだけでなく、「治人」を実践する社会の指導者として教育を通して達成されるべき目標であり、本来の儒者は、そのような理想像を掲げて現実社会に積極的にかかわり、社会を指導してゆくべき立場にある。中国・朝鮮の士大夫・両班は実際にそうである。懐徳堂学派には、そのような本来の儒者をめざそうとする気概がある。そのことから、江戸時代の身分制社会において、周辺的存在と見なされがちだった儒者から、現実社会に関わる本来の儒者へ、懐徳堂学派の儒者がみずから昇華させていった過程を検討したいと考えるに至った。そうすれば日本近世における儒教思想受容の変化の様相をさらに詳細に解明できると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代に大坂の町人が設立し、後に官許を得て公教育の担い手となった懐徳堂の教育思想を分析する。中国・朝鮮と違い、社会的地位が確立されていなかった日本の儒者がその不利を自覚しつつ、にもかかわらず庶民のみならず武士への教育に自己の職務を見出そうと積極性を発揮してゆく様相を明らかにする。

特に、懐徳堂学派の理念としての経学思想が現実世界に関わる経世思想—その一環としての教育思想—に反映される様相を解明して、日本近世儒教思想史上における懐徳堂学派の思想的立場づけを再構築することを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 第一は、江戸期の儒者としての懐徳堂学派の立場の分析である。江戸期の儒者は社会的地位が確立されていなかったとされる。そのような儒者の地位の向上のために努力した中井竹山の活動の様相を明らかにして、

あるべき姿を追究する本来の儒者としての中井竹山の思想を解明する。

(2) 第二は、中井履軒の著述の読解を通じた懐徳堂の経学思想の分析である。中井履軒の経学思想は、すでにその聖人観を中心にある程度、解明した。履軒の考える儒教的聖人は、教育によってめざされる究極の理想像である。本研究では、履軒の『論語逢原』『孟子逢原』等の四書研究のみならず、『周易逢原』『夏書逢原』等の五経研究も検討対象とすることで具体的に江戸期の社会の中で果たす社会的役割について、経学思想を通して履軒の考える理想的人格者像を解明する。

(3) 第三は、中井竹山の著述の読解を通じた懐徳堂の経世思想の分析である。竹山には『草茅危言』等、その経世思想を窺うことのできる資料が多く存在する。それらの資料を検討することで、懐徳堂の経営全般に責任を負っていた竹山の経世思想を明らかにする。特に、その中に見える新学校設置論等、教育に関する竹山の思想を解明して、懐徳堂学派の教育思想の様相を解明する。

4. 研究成果

平成23年度から平成25年度にわたる期間において得られた本研究の研究成果は以下の通りである。

(1) 第一に、日本近世期の儒者の社会的存在意義を明らかにするために、懐徳堂儒者の様相を例として儒者と知識人の概念を比較対照しつつ検討した。具体的には、儒者と知識人の語義の問題について、懐徳堂儒者に関する先学の研究を概観し、検討を加えた。その結果、狭義から広義にわたるさまざまな知識人の定義が存在することが明らかになった。そして、懐徳堂の儒者が狭義の知識人の定義に該当するかどうかを検討し、日本において、知識人の語自体が大正期後半以後に成立し、さらに近代の意を含んだ大衆との関係に知識人の性質が大きく影響を受けることを考えるならば、知識人の語がまだ存在せず、大衆も成立していない明治期以前の儒者を知識人—「狭義の知識人」—と称することは困難であることが明らかになった。大正期後半以後の近代における狭義の知識人の概念とそれ以前の広義の知識人の概念とが大きく相違する以上、安易に知識人の語を使用することは議論の混乱の原因になりかねない。したがって、江戸期の儒者に言及する場合、軽々に知識人の語を用いることは控えるべきだとの結論に達した。

そして、日本近世期の儒者、ひいては、懐徳堂の儒者の概念は、近代の意を含む狭義の知識人とは相違して、むしろ政治権力に積極的に関与しようとしていることを明らかにした。すなわち、儒者とは現実の社会と政治的にかかわろうとするいわば経世志向をも

つことがその本来の姿であり、懐徳堂第四代学主の中井竹山に代表される懐徳堂儒者にもその志向がうかがえるという方向性を示した。

(2) 第二に、懐徳堂の経学思想の分析である。具体的には、中井竹山の弟中井履軒の経学研究、ならびに老荘思想研究の検討を通して、これまでに明らかにした中井履軒の聖人観、すなわち、聖人が道徳的な理想像の性格のみならず為政者としての理想像の性格をも併せもつ人格者であるという立場が、同様の理想像でありながらやや聖人よりも下位に位置する君子に対する見解にも当てはまることを明らかにした。

聖人にせよ君子にせよ、江戸時代当時の朱子学者が道徳的理想像としての側面を強調する傾向があることを考えれば、為政者としての理想像を強調する点も履軒の立場の特徴と言っても良からう。そして、この履軒の立場は、実は朱子本来の立場、すなわち、宋代士大夫が「修己」と「治人」との双方を重視する立場に近い。

江戸時代の儒者が道徳的理想像としての聖人観・君子観を有していたのは、その時代の制約による所が大きい。なぜなら、たとい為政者の理想像としての聖人観・君子観を説いたとしても、武士が為政者として世襲的に支配する江戸期の世の中にあっては、身分的裏づけの曖昧な儒者が為政者になる可能性は非常に低かったからである。そこから道徳的理想像としての聖人観・君子観を儒者が強調するに至ったわけだけれども、懐徳堂の儒者、特に中井竹山・履軒の兄弟は少し様相を異にしていた。時代の制約の中で、竹山は懐徳堂第四代学主として、当時の老中松平定信に『草茅危言』を提出して、堂々たる経世論を唱えた。弟の履軒は厩大な経書解釈を通じて、「修己」と「治人」との双方を重視する本来の儒者の立場を明らかにした。

また、履軒の君子観については、特に君子・小人の相違を生じる原因として道への志向の有無を強調することがその特徴のひとつとして挙げられる。そして、君子と道とのつながりを踏んだ解釈から『中庸』に対する履軒の特別な思い入れも明らかにすることができた。

以上のように、履軒の経学思想には独自の特徴をうかがうことができる。そして、その履軒の経学思想の精髓が懐徳堂学派の経世思想の一環として教育思想にも反映されている様相を解明した。

(3) 第三に、日本近世期に生きた儒者としての懐徳堂学派の立場を分析して、その儒者意識を検討した。

懐徳堂第四代学主の中井竹山の立場は、朱子学の「全体本領ノ所」(『竹山先生国字牘』)を基底とするものだった。「全体本領ノ所」とは「修己」と「治人」との双方に通じるこ

とだった。したがって、「治人」すなわち、政治治術のみに拘泥して「修己」をおろそかにしていると竹山には見えた荻生徂徠や伊藤仁斎の立場を竹山は批判する。逆に「修己」、すなわち、道徳的内容を説くだけでも不十分だと竹山は考えていた。また、国全体に対する意識が希薄で、机上の空論の道徳や礼楽について高説をかざすだけの町儒者に対しても、竹山は強烈に批判していた。

懐徳堂自体も初代学主の三宅石庵のころには、町人のための学問所という意識が強かったけれども、竹山自身は、懐徳堂の官学化をみずからの使命と考えて、町人の学問所の立場から脱することをめざしていた。「修己」のみを説く町儒者でもなく、「治人」のみにとられる徂徠らの古学でもなく、「修己」を「治人」に及ぼす儒者、すなわち、本来あるべき儒者像を描くのが朱子学であり、そのようなあるべき儒者になりたいと竹山は考えていた。この竹山の強い願望が懐徳堂の官学化への熱意へと竹山のなかで昇華されていた。

江戸時代の儒者は、社会における批判的役割を果たす近代的な知識人とは相違して、江戸時代の身分制社会では周縁的存在だった。そのような位置づけであるにもかかわらず、懐徳堂学主たる中井竹山は、現実の社会に積極的にかかわる教育者として当時の社会体制の内に儒者を位置づけようという意識があることを明らかにした。

(4) 第四に、懐徳堂の経世思想の分析である。具体的には、中井竹山の著述である『草茅危言』や『竹山先生国字牘』に見える諸藩の儒者や武士と竹山との間に交わされた書簡等を題材として教育に関する竹山の思想を検討し、竹山の経世思想が教育思想に反映される様相、すなわち、儒者が教育者として社会的地位を確立する様相を解明した。

竹山は武士が支配階層を形成する江戸時代に生きていた。その中で儒者としてみずからの任務を遂行する在り方を考えた竹山は、学校における教授職に活路を見いだそうとした。ただ、その方法は近世後期朱子学派の尾藤二洲や頼春水と同様であり、それだけならば竹山の立場の特徴とは言えない。

竹山はその学校における教育について、庶民教化のみならず、為政者たる武士、とりわけ君主に眼を向けていた。なぜなら本来の儒教では、正しい政治を行なうためには君主が最も重要な役割を果たすべきだと考えられているからである。このように為政者としての君主の任務に眼を向けたことは竹山の思想の特徴である。

また、「修己」と「治人」と、すなわち、道徳と政治との双方の重視が中井竹山に代表される懐徳堂の儒者の基本的立場だった。そして、道徳と政治とのつながりの具体的様相とは、「修己」と「治人」とを同列に置いたうえで、両者を止揚することによってさら

にレベルアップした「自己」を見出すような統合であり、そのような独自の「自己」のあり方を懐徳堂の儒者が考えていた可能性を明らかにした。

以上のように、本科学研究費補助金を得た三年間の研究期間で、「修己」と「治人」との双方を重視する懐徳堂学派の経学思想が現実世界に関わる経世思想—その一環としての教育思想—に反映される様相を解明することができた。

君主の教育に眼を向けたことと自己を修めることがすなわち他者を治めることでもあるといった社会全体に対する意識を君主がもつべきだと考えたこととは中井竹山に代表される懐徳堂儒者の思想の特徴である。つまり、社会全体に対する責任感、あるいは為政者の責任感に言及するところに本来の朱子学をめざす懐徳堂学派の儒者の面目があった。

そして、このような社会全体に対する責任感をもとにした現実の政治実践に資する学問を「実学」と呼ぶことができるとするならば、懐徳堂の儒学思想の特徴を実学思想ととらえることが可能になる。このようにとらえることで、寛政改革期から幕末期にかけての日本近世の実学思想史上に懐徳堂学派の思想を位置づけることができる。ただ、その見通しをあとづけるためには、懐徳堂学派の儒者のみならず、近世後期朱子学派の儒者や昌平坂学問所の儒官で幕末期の儒学界に大きな影響力を有した佐藤一斎、さらには福井藩主松平春嶽のもとで実際の幕政改革に携わった朱子学者横井小楠など、幕末期の儒学思想についてさらに詳細に研究を進める必要がある。その研究は今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 藤居岳人、中井竹山がめざしたもの、懐徳堂研究、査読有、5 号、2014、pp. 13-33
- ② 藤居岳人、中井履軒の君子観、懐徳堂研究、査読有、4 号、2013、pp. 15-34
- ③ 藤居岳人、中井竹山の儒者意識—その経学研究を手がかりとして—、懐徳堂研究、査読有、3 号、2012、pp. 27-45

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 藤居岳人、中井竹山がめざしたもの、第 3 回懐徳堂研究会、2013/12/15、大阪大学
- ② 藤居岳人、中井履軒の君子観、第 11 回名古屋大学・大阪大学研究交流会、2012/11/24、大阪大学
- ③ 藤居岳人、中井竹山の儒者意識—その経学研究を手がかりとして—、第 60 回東北中国学会、2011/5/29、秋田大学

〔図書〕(計 1 件)

- ① 湯浅邦弘・藤居岳人他、ミネルヴァ書房、名言で読み解く中国の思想家、2012、376、(共著) pp. 75-97

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤居 岳人 (FUJII, Taketo)

阿南工業高等専門学校・一般教科・教授

研究者番号：80228949